

市民本位のローカルルールを構築する

都市公園は誰もがいつでも何でもできる、全体から見れば希な空間であり、法令による禁止行為もごく限られています。しかし、「公園は何もできない」と揶揄されることも多いのが現状です。利用制限を最小限とし、自由で開かれた公園とするため、条例とローカルルールとに関わらず市民本位の最適なルールを構築する必要があります。一方で自由な公園を継続するには、「行儀良く」公園を使う利用者のモラルを育てることも公園の役割です。

利用者目線によるルールの作成と運用が重要ですが、公園緑地の本来意義が損なわれては本末転倒です。地域と社会のウェルビーイングにとって前向きなルールであるかどうか、住民参加のワークショップや公園活用推進協議会により丁寧に話し合うことが重要です。また、先行的な緑のローカルプランモデル事業を展開してみることもよいでしょう。

具体例 Concrete plan 市民主体の公園運営会議

みなとのもり公園（神戸市）では、市民主体の「みなとのもり公園運営会議」で、公園の活用方策を決めています。公園の整備前から若者が参加し、スケボーなどのニュースポーツができる広場の整備を実現しました。開園後は、スポーツ部会で広場の利用や清掃を自主的に行ったり、森づくり部会で植栽管理を行ったりしています。また、夏には「公園で花火をしてもいいよデー」を設け、一般市民も楽しく花火を楽しむことができます。公園のルールは禁止するためではなく、市民が主体となって公園を活用するためのもの。公園ごとに違ったローカルルールを決めれば「こんなことやりたい!」を実現することができます。



Encourage spontaneous activity

自発的(アクティブ)な活動を促す

自然とのふれあいや適度な運動は、日常のストレス耐性や、能動的な行動変容につながる自己肯定感などの涵養に効果があります。ウェルビーイングは与えられるものではなく、自ら参加して得られるため、ウェルビーイングを向上させるためのすべての自発的(アクティブ)な活動を促します。イベント、身体活動、芸術・娯楽活動、維持管理活動、介護福祉など、緑のある屋外空間を活かしたあらゆる活動が推進されるべきです。

無理強いや義務感からの行動は継続につながらないだけでなく、自己肯定感を抱くこともできません。いかに自発的・自律的な行動を促すかが肝要であり、ネガティブサインからポジティブサインへの転換や、知らず知らずに行動を導くナッジ理論の活用、出かけたくなる・歩きたくなるアクティビティの展開などが期待されます。



具体例 Concrete plan

できない公園からできる公園へ

豊島区が進める「小さな公園活用プロジェクト」では、禁止ではなくできるを伝える「〇〇できない」公園から「〇〇できる」公園への転換を進めています。西巢鴨二丁目公園には禁止事項を伝える「ネガティブサイン」は最小限に、できることを伝える「ポジティブサイン」を設置しました。今後できることが増えればサインの内容も増やせるデザインです。

「人々を強制することなく、望ましい行動に誘導するようなシグナルまたは仕組み」と定義される「ナッジ」も、健康づくりなどに広く活用されるようになっていきます。暮らしているだけでウェルビーイング向上につながる行動が促されるまちづくりは、究極的なナッジの活用です。



Policy 6
方針

Thorough green management

グリーンマネジメントを徹底する

具体例 Concrete plan



日本庭園の伝統的な植物管理

植物管理は伝統的に日本の得意とするところ。観光資源として世界に誇る日本庭園は、作庭以来の熟達した剪定技術による植物管理で美しい姿を継承しています。このような技術は何も庭園にしか使えないものではありません。公園緑地や緑道、公開空地、街路樹など街の緑のマネジメントにも大いに有効です。これらの公共的な緑を庭園に仕立てるのではなく、それぞれが美しさや快適さを最大限発揮できるようにする技術の応用も、日本の職人の得意とするところ。先人の知恵と伝承されてきた技術により、愛される緑をつくっていきたいものです。

公園緑地は、動植物をはじめとする自然物が重要な構成物であり、日々成長し変化する空間です。開園したての公園では若い樹木が植えられまだまだ緑が少ない印象でも、5年10年と時間が経過するにつれて豊かな緑量に育ってくれるものです。しかし、何も手を入れずにいると樹木が込み合っ競合したり暗い印象になったり、古い支柱が残っていたりという緑の気持ちよさを発揮できない状態になってしまいます。空間の美しさや快適さはその空間の評価や緑の効果を左右するため、いつでも好まれる空間であるよう維持することが大切です。

緑の尊厳が失われると、美しさや快適さも失われてしまいます。確かな技術ある専門家が矜持をもってマネジメントする必要があります。そのためには、緑の管理水準によるウェルビーイング向上効果、緑の老朽化や危険性の評価といった客観的な指標により費用対効果を明示し、管理と対策に費用を割くことが正当であるとの認識を進めなければなりません。

社会経済の循環に位置づける

公園は本来的に収益性のあるものではなく、収益性以外に価値を求めてつくられてきました。これは、行政が設置してきた都市施設であることからわかりますし、だからこそ収益性を見込めない場所にもこれまで公園を得ることができてきました。公園管理への民間参入が注目されていますが、公園緑地のなかで経済を完結させようとせず、本来価値により公園緑地の外側の大きな経済の循環に位置づける必要があります。

公園管理予算は横ばいで、面積当たりで考えると減少しています。この状況を公園緑地だけで解決はできません。公的予算を圧迫する医療費を公園緑地への投資で減少させるというような、大きな枠組みでの理解が不可欠です。公園の資産評価、自然資本会計の検討、健康便益評価の推進、不動産価値への影響等、公園緑地が充実することによる経済波及効果を測定し、公園緑地への投資を促します。



都市緑地の経済効果

都市緑地は、健康や社会福祉だけでなく、都市経済にも多くの便益をもたらします。緑地の豊富な環境は周辺地域の景観を美しくし、住民の心理的な健康感を高めることができます。緑地に近接する住宅はより高い評価を受け、より高い価格で取引される傾向があります。このように都市緑地は、地域の不動産市場において、投資家や開発者にとっても魅力的な要素です。

また、都市緑地により健康的なライフスタイルを促進することで、生活習慣病などの発症を予防することができます。これは医療費の削減や効率的な医療サービスの提供をもたらします。緑の空間にはストレス解消やリラックス効果もあり、従業員のメンタルヘルスの改善や、創造的な発想の促進によって働く世代の生産性向上にもつながります。

より緑豊かな都市の実現に向けて、都市緑地の整備や活用がますます重要となっています。

具体例 Concrete plan